



蚕都上田ものがたり ～歴史のとびら～

今から約百年前、日本は世界の蚕糸王国であり、蚕糸業は外貨獲得の中心産業でした。

この産業において、長野県は日本の蚕糸王国でしたし、上田はその長野県の蚕都でした。

蚕都上田・

『都』の源流をさぐる

松平忠愛^{ただかね}という殿様がいる。将軍吉宗働き盛りの享保13年（1728）に上田藩主になり、寛延2年（1749）隠居、子の忠順^{ただより}が家督を継ぐ。将軍は家重に替わり、田沼意次^{おきつぐ}が地盤を固めつつあった。

忠愛の死の3年後、「宝暦騒動」という百姓一揆^{うゑだじまくずれごう}が起きる。その次第を記した「上田編崩格子^し」には一揆の遠因として忠愛の乱行が書かれている。在京の折の吉原通い、上田の屋形のお茶屋御殿の53の部屋には東海道五十三次宿々の

名物を集め、前垂掛^{まえたれ}の美女に接待させたという。しかし、一人で遊んでいてもおもしろくないはずで、家中はもちろん、有力な町人や在方の名主なども招かれたことだろう。忠愛によって上田に洒落た遊興という都市文化の種が蒔かれたことは間違いない。

江戸の茶道は専ら石州流だった。紀州の支藩新宮藩ゆかりの川上不白^{くわがし}が千家の茶を導入したのは家重の時代だった。岐阜大学教授の森田晃一^{こういち}氏によると、当時幕閣内に紀州派閥といったものが暗に存在し、その陰に不白の力が働いていたという。松平忠順は、不白の門人帳に名を連ねる大名茶人の一人だった。茶道は政界の人脈に大きな影響をもっていたし、一方で吉原は今風にいえば外交の重要な舞台だった。都市文化をぬいては政治も経済も語れなくなっていた田沼時代、上田は周辺の町に先駆けて江戸を吸収していたのだろう。藩をあげての名産上田紬の洗練された縞柄も、その成果だった。

長野のように有力な仏閣を持つわけでもなく、佐久のような広大な平にあるのでもなく、松本より禄高も低い上田が「都」の字を冠して「蚕都」とよばれた背景には、江戸の遊興文化を基礎に持つ三カ所の歓楽街の存在を無視できない。そして今、「都市」は、そこに集まる人に楽しみを与えるには、どうしたらいいかという課題をつきつけられている。

文責：益子輝之



開港したころの横浜海岸風景『横浜海岸フランス役館之景』（横浜開港資料館所蔵）

安政6年（1859）6月、上田から横浜へ輸出用の生糸が送られた。

時の上田藩主松平忠固^{ただたか}は、2回にわたり幕府の老中を務めた人である。その立場上、外国からの情報をより早く得ることのできた忠固は開国・貿易推進の姿勢を明らかにしていた。安政5年5月、幕府は翌6年6月に神奈川などの港を開き貿易開始を決定した。忠固は上田藩の産物を外国に売ることによって上田藩の財政を立て直そうと考えており、上田藩は後に幕末最大の貿易商となる江戸の中居重兵衛と安政6年の正月から貿易に関しての相談を始めた。

安政6年2月末、藩命を受けた城下商人原町鼠屋伊藤林之助らは江戸・横浜へ出立、上田藩江戸産物会所で外国貿易の準備にとりかかった。

同年3月、伊藤林之助は上田藩江戸屋敷の重役と打合せ、中居重兵衛とは頻繁に相談。4月、外国へ輸出しようとする上田藩の産物がほぼ決定。生糸、木綿、真綿、麻、うるし、紙、生蠟^{なまろう}、傘、石炭油、松油、人参、麦粉、鉛、鋸、煙草などである。これが幕末における上田の産物？と驚かされるものも含まれている。5月には信州上田の地で、輸出用産物の集荷が盛んになる。

6月2日、横浜開港。この日以降外国船が入港。外国商人は20日前後から横浜へ上陸。江戸に居た伊藤林之助らの横浜通い、横浜泊が多くなる。

6月19日、中居屋が横浜の港に開店。朝一番に来店したイギリス商人は、並べられた上田産物中の「生糸」に注目し商談。林之助はこの情報を直ちに信州上田へ。

上田では早速「糸荷」を横浜へ発送。日本の生糸貿易が始まった。

7月、8月と糸荷の出荷量はうなぎのぼり。信州、上州、甲州、奥州などの商人は糸荷を大量に横浜に持ち込み、イギリス、フランス、オランダ、アメリカなどの商人へ売り込んでいく。以後、上田の生糸は「上田糸」「依田糸」としてヨーロッパへ、後にはアメリカへ輸出され続けた。

文責：阿部 勇

その時、上田は 日本のウォール街だった。



第十九国立銀行
『上田街諸名家一覽』より

明治9年(1876)8月、筑摩県が長野県と合併(合県)して、今の長野県が誕生する2か月前の6月に、第十九国立銀行の母体となる彰真社が長野町に開業し、原町に上田支店が置かれた。翌年の明治10年、彰真社は改正国立銀行条例

にもとづき、本店を上田町に移し第十九国立銀行を開業した。このほか長野県内には、松本、飯山、松代、飯田と合わせて5つの国立銀行が開業した。また、国立銀行のほかに、私立銀行や無^む尽^{じん}的金融機関であった銀行類似会社が多数設立された。

明治17年、長野県は私立銀行31銀行で全国2位、銀行類似会社は107社で日本一であった(『大日本帝国統計年鑑』)。そのうち小県郡内における私立銀行は8銀行で県内24%、銀行類似会社は83社、76%を占め、いずれも県内一であった。

つまりは、「その時、上田は日本のウォール街だった」ことになる。

これほどの金融機関を支えたものは、それはもちろん、蚕種を中心に繁栄した蚕糸業であった。

なお、第十九国立銀行は、明治30年、第十九銀行と改称した後、昭和恐慌の最中の昭和6年(1931)8月、六十三銀行と合併して、現在の八十二銀行となった。

文責：小平千文

〈トピックス〉

もし、十九銀行が…

もし、「第十九銀行」が「第二十銀行」だったら、「第六十三銀行」と合併することで $20+63=83$ となり、銀行名は「八十三銀行」となる。「銀行にとって破産を意味する83(ハサン)を社名にする訳にはいかない」

当然ですよ。



現在の八十二銀行上田支店

千曲川原にできた上田駅 ～松尾町、天神町の誕生～

明治21年(1888)8月15日長野―上田間の鉄道が完成し営業が開始された。明治26年には直江津―高崎間が開通し、それ以前に開通していた部分とあわせて上野―直江津間が全通した。鉄道の開通による上田駅の設置により、上田は城下町から商業都市へと転換することとなった。



明治42年(1909)改築の上田駅

『図説・上田の歴史』(郷土出版社)より

上田駅の設置は、はじめ町の北方大星川原に計画されたが、太郎山山麓一帯は桑畑が多く、汽車の煤煙が桑の葉に悪影響を及ぼすと反対され、最終的に現在の土地に決まり工事が開始された。当時この土地は段丘崖の下の千曲川河原の荒地であった。

駅の開設に当っては、海野町と原町方面との丁字路から段丘を切り崩して駅までの道路の開削が上田町に割り当てられた。こうしてできた停車場通りにつくられたのが松尾町であった。停車場より海野町へ直線に開通した新道路の工事費には7千余円が必要とされ、地元負担とされた。

駅の設置と松尾町・天神町の形成は、①商業の中心が町の南に移動して、北国街道沿いの鎌原・紺屋町・柳町方面がさびれたこと、②鉄道の乗降客や物資の集散により松尾町界隈が賑やかとなったことなど、町全体を大きく変えることになった。

また、鉄道を通じて大量の物資が動くようになった。例えば、明治23年に89万8239枚の蚕種が上田停車場で取り扱われ、明治32年には、貨物の到着トン数が長野を上回り、上田・大屋駅が中南信地域と北信越・関東の交流点になったことなどが上げられる。

文責：富田隆順



現在の上田駅(お城口)

蚕糸が結ぶ映画と上田

鈴木清順^{せいじゆん}監督と映画評論家の品田雄吉さんは無事「あさま」に乗ることができたでしょうか？ 今の様にケータイでの確認もできない状況で、我々スタッフは不安を抱えたまま2人を待った。

その日の朝、日本の中枢部東京がサリンガスによって襲われた、あの「地下鉄サリン事件」だ。平成7年(1995)3月20日、上田では「うえだ城下町映画祭」の前身となる「シネマ&フォーラム'95」が行われようとしていた。

この日の「シネマ&フォーラム」のプログラムは映画「けんかえれじい」の上映と、鈴木清順・品田雄吉の座談会だった。

予定どおり上田に着いた二人は、開演までの時間をロケ現場である上田史跡公園や旧北国街道を訪ねることにしたが、最もお世話になった上塩尻の馬場さん宅を訪ね

た際、残念ながら当の馬場直次郎さんは前年の12月に他界されていた。折しもその日は、直次郎さん亡くなって最初に向かえるお彼岸の中日だった。監督は撮影時の思い出を熱く語り、馬場さんは我々スタッフにまで彼岸のお萩を振る舞ってくれた。



左から馬場慶一さん、鈴木清順監督、品田雄吉さん
(1995.3.20)

当初、中心市街地の活性化を図って企画されたこのイベントは、その準備段階から思わぬ副産物を産むことになる。そのひとつが、過去にはロケ地としての上田の再認識であり、未来に向かっては、上田が知的財産の創出装置ともいえる映画(映像文化)の担い手と成りうる資格を得たことであろう。

上田がロケ地としての評価が高い理由は、天気の良いさ等様々あるが、その原点にはやはり、馬場さんのような蚕糸業で財を極めた映画好きのパトロン(サポーター)の存在があり、蚕糸業があった。「蚕糸が映画と上田を結んだ」と言っても良いだろう。

文責：山崎憲一

映画「たそがれ清兵衛」の撮影風景
バックの建物は平成23年(2011)
に火災に見舞われた

あとがきにかえて～ 日本と上田の歴史が交差する場所

「蚕都上田ものがたり」編集のための打合せの席で、歴史研究者の阿部勇さんがこんなことをおっしゃいました。

吉村昭の小説『桜田門外ノ変』の「あとがき」に、井伊直弼を襲撃したときに使用された「短銃が（中居）重兵衛から提供されたことは疑いの余地がない」と書かれている——

「桜田門外の変」（安政 7 年（1860））は、歴史に詳しくない私でも中学校の教科書で習ったことのある歴史上の重大事件、そして、中居重兵衛は、のちに“蚕都”と呼ばれるほどになった上田の外国貿易を支えた商人で、「蚕都上田ものがたり」の中の「日本初の輸出生糸は上田から」にも登場しています。

阿部さんによると、小説「桜田門外ノ変」で使用された短銃と中居重兵衛との関わりは事実ではないらしい、とのことでしたが、「桜田門外の変」を実行した水戸藩士と中居重兵衛に接点があったのは事実のようです。資料で明らかにならない部分を想像力で補い、読み手をワクワクさせる物語を生み出すのが小説家の仕事ですが、小説家にそのような想像をかきたてさせるほどに、当時の中居重兵衛の存在は大きかったと言えるのではないのでしょうか。

興味をおぼえ、小説『桜田門外ノ変』を手に取りました。

物語は「桜田門外の変」を実行した水戸藩士の側から描かれていますが、その中で数カ所、当時の上田藩主・松平忠固の名前が出てきます。物語の中で、松平忠固は大老・井伊直弼との権力争いに敗れ老中という幕府の要職を失うのですが、物語の本筋ではないこの事実は、単に事実として淡々と記述されているにすぎません。



打合せ中の編さんチーム

ですが、中居重兵衛と松平忠固、明治維新に向けてめまぐるしく変転する日本の歴史の中に上田ゆかりの人物が見え隠れしているということは、逆に、“上田の歴史から日本の歴史が見えてくる”ということでもあります。知れば知るほど様々な人や出来事のつながりが見えてくる——歴史を学ぶ醍醐味のひとつはここにあるのだ、とあらためて気づかされました。

文責：山崎隆之

蚕都上田プロジェクト「蚕都上田ものがたり」編さんチーム

チームリーダー：前川道博

スタッフ：小駒はるみ（年表構成）・児玉裕・土屋郁子・山浦和徳・山崎憲一・山崎隆之・吉澤隆一

監修：阿部勇・小泉勝夫・山浦直人 特別協力：新津新生 協力：上田小県近現代史研究会